

干潟にくらす ～ 北九州曾根干潟の専門漁師～

平安啓乃
北九州市立大学 文学部人間関係学科

要 旨

北九州市曾根干潟で専門漁師をしている山田氏は、天然ウナギ漁をはじめとする多くの漁業に携わっているベテランの漁師である。山田氏が行なっている漁業の全てには干潟の地形や環境に合わせて様々な工夫があり、伝統的な方法に自らの経験を加味しながらの、日々の思考錯誤があった。古くから漁業を営む場として地域の重要な役割を果たしてきた曾根干潟は、豊かな水産資源を提供し、そこでくらす人々の生活を支えている。しかし、都市近郊にありながら多くの絶滅危惧種が生息し、ズグロカモメをはじめとする渡り鳥が毎年越冬に訪れる曾根干潟は、近年、新北九州空港の建設などにより危機的状况にあるとされ、環境保護の観点から注目を集めている。季節ごとに漁法を変え、旬の魚を採捕してきた山田氏は、干潟を知り尽くした存在であり、漁業に携わるようになって40年の経験からくるそれらの知識は、干潟を保護する上でも必要なものではないだろうか。曾根干潟の専門漁師の漁労活動を通して、その漁獲物の消費などから、漁業者と周辺地域の結びつきを考えると共に、今後の曾根干潟の保護のあり方はどうあるべきかを考察したい。

目次

はじめに	3-3 カキの養殖
第一章 曾根干潟について	3-4 ウナギ漁
1-1 曾根干潟の概要	① シバ漬け漁
1-2 豊前海の漁業	② 竹筒漁
1-3 曾根干潟の漁業	③ ヤナ漁
1-4 干潟を守る地域の活動	④ 地獄釣り
第二章 専門漁師、山田恵次氏	⑤ 延縄漁
2-1 山田氏について	⑥ 搔きうなぎ
2-2 山田氏の日	⑦ うなぎてご
2-3 季節の漁	⑧ 穴釣り
2-4 漁師の気象予報	⑨ かしばり
第三章 山田氏の行なっている漁業について	第四章 朝市
3-1 定置網漁	第五章 考察
3-2 カニ漁	謝辞

はじめに

「天然ウナギ漁をしている漁師がいる」と聞いて、私は福岡県北九州市小倉南区に位置する曾根干潟を訪れた。曾根干潟は、都市近郊にありながらズグロカモメをはじめとする渡り鳥の越冬地として知られ、絶滅危惧種が多く生息する場として環境保護の観点

から注目を集めている干潟である。町の人々や漁協を訪ねて紹介された山田氏は、干潟に面した曾根新田で生まれ育ち、漁業に携わるようになって約40年になるベテランの漁師であった。山田氏は、今年(2002)曾根干潟でウナギ漁をしている唯一の方であり、年間を通してウナギ漁のほか、

定置網漁、カニ漁、カキの養殖、刺網漁業などの様々な漁業に取り組んでいる専門漁師である。本稿は、干潟のことを知り尽くした山田氏の漁法とその様子、朝市を通して漁獲物の流通から見られる周辺地域とのつながりについて、2002年の9月から11月までの間、週に2回の頻度で山田氏のもとへ通い、記録したものである。

第一章 曾根干潟について

1-1 曾根干潟の概要

曾根干潟は北九州市小倉南区曾根新田に面しており、周防灘の西端に位置する北部九州最大の干潟である(図1)。大潮の干潮時には海岸から約1.5キロメートル沖合いにある間島付近まで潮が退き、干満の差は最大4メートルになる。沖合いの周防灘には羽島があり、その後方には建設が進められている新北九州空港の人工島がある。

曾根地域は、大昔は奥深く海が湾入していたものと考えられる。記録に残された最も古い干拓は、寛永の頃(1624~1643)に細川忠興が行なった旧国道内側の干拓(約80ha)である。その後、1780年代から1960年代までの間に次々と干拓が進められて、その面積は約505haとなり、この300年間に約585haの面積が干拓により造成された。

干潟の面積は約517haであり、地盤高は干潟北部が南部よりもおおむね約50cm高くなっている。間島西側の砂州は西の方向に延びており、最も高い干潟面は大野川河口付近の砂州である。干潟を形成する沖積層の厚さは、干潟中央の岸から約500メートルの地点で約8cm程度である。

干潟に流入する河川は北から竹馬川、大野川、貫川、朽網川の4本である。これらの河川から供給される淡水の量は、年間約7千万m³と推計されており、最も多いのは竹馬川(36.5%)、継いで朽網川(21.2%)である。また、竹馬川に放流されている曾根浄化センターからの排水量が淡水流入量の24.3%を締めている(註1)。

曾根干潟は、その底質や低生動物の分布から、大きく4つのエリアに分けられる。干拓地と海の接点の岸付近は、地質は泥質。北側にはチドリ類をのぞ

く鳥類がえさ場、休息場としていて、南側はカブトガニの生息地となっている。

その沖合いで間島までの間は細かい砂や砂泥質で、シオフキガイなど大型の二枚貝やオサガニが多く生息し、またズグロカモメやチドリ類がえさ場としている。

間島の北側は礫の混ざった砂質で、アサリやシオフキガイなどの二枚貝の宝庫となっている。

また、間島の南側エリアは砂泥質で、ユリカモメやツクシガモをはじめとする多くの鳥類のえさ場となっている(註2)。

曾根干潟は絶滅危惧種のズグロカモメの越冬地として、諫早湾とともに全国的に知られているほか、天然記念物のカブトガニや、その他の絶滅危惧種である13種類の魚介類が生息する場となっている。新北九州空港の建設や東九州自動車道の整備によって干潟の形状が変わり、生態系に与える影響が懸念される中で、これらの自然を保護しようとする活動が、平成5年から地元の曾根東小学校を中心に始まり、現在では漁協や自治会の参加する地域の行事として定着している。しかし、曾根干潟とその後背地を埋め立て、新北九州空港を核にしたリゾートタウンを造成するという周辺地域の総合開発構想などが北九州市によって発表されており、曾根干潟で暮らす漁業者にとって危機的状況にある。

干潟に面した曾根新田には広大な水田が広がっており、そこに暮らす約220世帯のほとんどが農業を営んでいる。226世帯のうち、カキの養殖と農業を兼業しているのが25世帯、漁業のみをおこなっているのが現在(2002年)5世帯である。間島の周囲は多くの魚介類が生息し、曾根新田に住む漁業者の主な魚場となっている。

1-2 豊前海の漁業

曾根干潟は、瀬戸内海の西部に位置する福岡県の豊前海にある。曾根干潟の漁業の前に、豊前海の漁業について見ていきたい。豊前海は瀬戸内海の西部に位置し、比較的単調な109kmの海岸線で、北東方向に開いた広さ658km²の海である。この豊前海には、大小17の河川が流れ込み、その河口

周辺には広大な干潟が広がっている。その沖合いには砂泥で覆われ水深15mの最深部まで穏やかに傾斜している。干満の差は最大4mあるが、全体的に流れは穏やかである。このように発達した干潟と砂泥質の海底を持つ豊前海は、アサリ、エビ、カニ、カレイなどの資源に恵まれると供に魚介類の幼稚魚の生育場として重要な役割を果たしている。

北九州市田野浦から築上郡吉富町にかけての豊前海沿岸には17漁業協同組合があり、約1000人が漁業に従事し、一年間に6568トン（平成7年）の生産をあげている。このうち、漁船漁業が5081トンの生産で大半を占め、養殖漁業は、1487トンの生産である。

漁業種別生産では、小型底曳き網が最も多く、次いで採貝、かご、小型定置網、刺網の順で、これら5業種で漁船漁業生産の大半を占めている。養殖漁業としては、ノリの養殖とカキの養殖が営まれており、生産量はノリがカキを若干上回っているが、最近ではノリの生産量が減り、カキの生産が増えている。

魚種別生産では、アサリが最も多く、次いでシャコ、ガザミ、タコ、カレイ、コウイカ類の順で貝類、甲殻類が、上位を占めている。中でもガザミは全国屈指の生産量を誇っており、特産品として「豊前本ガニ」という名前を付け売り出している（福岡県水産農林務部水産振興課『豊前海のさかな』）。

1 - 3 曾根干潟の漁業

曾根干潟は、古くから漁業を営む場として地域の重要な役割を果たしてきた。しかし、乱獲や干拓などによる魚場環境の変化などにより漁業資源が減少し、漁獲収入の低迷が大きな問題になっている。さらに北九州市にあるため、漁業以外の就業に恵まれており、若者の漁業離れが著しく、漁業の不活性化を招いている。

曾根干潟では、柵網漁業、カキの養殖が主要漁業で、他に刺し網漁業、カゴ漁業などが行なわれている。

かつてさかんだったノリの養殖は、全国的な過剰生産に伴い経営体が減少、品質の悪化などにより、現在曾根干潟では行われなくなった。冬季の漁獲収入を向上させるため漁協で協議

を重ねた結果、ノリ養殖に代わるものとして、昭和57年にカキの養殖の話が持ちあがり、現在はカキの養殖がさかんである。

また、曾根新田に暮らす6つの経営体によって一年を通して定置網漁が行なわれており、春にはカレイ、イカ、夏はスズキ、アナゴ、秋や冬にはヒイラギやフグ、エビなど、季節ごとに様々な魚介類が生産されている。

カゴ漁業では、ガザミ（カニ）が多くとれ、特産品「豊前本カニ」として多く出荷されている。

これらの漁獲物は生鮮魚として、毎朝7時から開催される朝市に出荷され、地元を中心に流通している。

1 - 4 干潟を守る地域の活動

広い曾根新田と縦横に流れるクリーク、北部九州最大の曾根干潟などの豊かな自然に囲まれた北九州市立曾根東小学校では、これらの地域環境を生かし、環境教育を地域と共に展開している。

曾根東小学校の校内には、曾根干潟に関する標本や書籍、野鳥観察の道具などを展示した「曾根干潟の部屋」や、曾根干潟の魚を水槽に入れた「いそね水族館」があり、市内や県外からも見学者が訪れている。

平成5年9月に、くちばしに釣り針のささった野鳥をみつけた小学生が「曾根干潟の野鳥や生き物を守ろう」と干潟周辺のごみ拾いを始めたことから「曾根干潟クリーン作戦」と呼ばれる活動がはじまり、今年で9年目になる。2年目から漁協、自治会、大浜保育所などが参加するようになり、現在では地域行事として定着した（註3）。

これらの活動との関係は不明であるが、過去6年間で23～73つがいしか曾根干潟に産卵に訪れなかったカブトガニが、2001年度にはその三倍に増加し、全国で最も多い233つがい産卵に訪れた（註4）。

全国的な規模で展開されている「野鳥を守る会」から発足した「曾根干潟を守る会」では、1997年に諫早湾が締め切られた4月14日を「干潟を守る日」として、曾根干潟で野鳥の観察やピクニックなどのイベントを行ない、諫早湾の回復と各地の干潟や湿地の保全の輪を広げていくためのキ

キャンペーン活動を行なっている。また、貴重なズグロカモメを始めとする野鳥を保護しようと、曾根干潟をラムサール条約（特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）の登録湿地にしようとする動きもみられる。

第二章 専業漁師、山田恵次氏

2 - 1 山田氏について

山田恵次氏は、昭和22年5月10日生まれで、現在55歳。曾根新田で生まれ育ち、漁業に携わるようになって約40年になる。

山田氏は、漁師であった父親の漁に、小学校に上がる前からついて行っていた。中学生になる頃には、当時行なわれていたノリの養殖や定置網漁などの漁を手伝うようになった。

20代の頃には、曾根新田を離れて数年間サラリーマンを経験したことがあり、「サラリーマンが安定していて1番いい。漁師は大変だ」と山田氏は語るが、父親の後を継いで漁業に携わるようになったのは、幼い頃から慣れ親しんでいた漁に対する楽しさを知っていたこと、「男なら勝負をしたかったからだ」と、語る。

28歳の頃、現在の妻であるケイ子さんと結婚。その後、漁協の様々な資格審査を受けて正組合員となり、漁業者として独り立ちした。

妻のケイ子さんは、山田氏と共に毎日漁に出ているが、貫山の出身であるケイ子さんは海や漁に不慣れであったため、結婚当初は船酔いに困り、台風が来れば、定置網やカキのいかだへの影響が心配で眠れない日が続くなど、大変な苦勞をしたという。

山田氏は、曾根新田に600坪の畑を所有しているが、他の住人のように農業との兼業ではなく、漁業のみで生活している。年間を通して定置網漁業を行なっているほか、冬はカキの養殖、夏はイカやあなご、アミ、秋から冬にかけてカレイなどの刺し網漁業、カニをとるカゴ漁業など様々な漁を行なっており、夏には昔からの方法でうなぎ漁も行なっている。山田夫妻が漁を休むのは台風などで海が荒れて漁に出られない日に限られており、年間を通して10日から14日ほどしかない。「毎日海に出ていないと、魚の

ことはわからない」と山田氏は語る。

また、曾根新田に住む他の漁業者が行なっているのは主にカキの養殖や定置網漁で、刺し網漁業や、ウナギ漁などの雑魚漁業を営んでいるのは山田氏だけである。いわば新田に住む漁業者の中で最も熱心に漁業に取り組んでいる人と言える。たとえば、平成二年に開催された「福岡県漁村壮青年婦人研究活動実績発表大会」では、曾根漁協壮青年部の代表に選ばれ、カキの養殖について発表した経験を持つ。現在では、干潟や漁業について、小学校で子ども達の一日講師を勤めたり、「曾根干潟クリーン作戦」にも参加している。

しかし、山田氏は「曾根干潟を守る会」による、曾根干潟のラムサール条約登録湿地への動きには反対している。曾根干潟がラムサール条約の登録湿になると、杭を一本立てるにも国への申請が必要になり、そこで漁業を営むことが難しくなるためである。山田氏にとっては、絶滅危惧種の野鳥であっても、時には魚をとるための餌を食べられたり、漁獲物を奪ったりする漁業の邪魔者であり、「野鳥にとって干潟が貴重であることや、開発によって危機的状況にあることは理解している。こういう議論には右も左もあることだが、漁業で生活を営んでいる自分らは反発を覚える」と山田氏は語る。

朝市が終わると、山田氏は主に刺し網漁業の網を編んだりして過ごす。「カレイなら、カレイの大きさ。カニなら、カニの大きさ。網目の大きさも形も違う。」と話しながら、山田氏はテキパキと慣れた手つきで網を編んでいくが、その編み方は、父親がしていた頃に見よう見真似で覚えたものだという。「漁に関する知識も、手伝いをしながら覚えたね。はっきり何かを教わったことはないよ。ただ、漁師になって80年くらいになる大先輩がいて、わからないことがあると、その人に昔からよう聞きに行っていた。しかし、ほとんど自分の経験によるものだね」と山田氏は語る。「意地悪で教えないわけではないぞ。たくさん魚が取れる方法をみんなに教えてしまったら、自分の漁ができなくなるし、天候や風向きは24時間変わるから、100%これだといえる方法はない。昨日、たくさん魚が居た場所に、今日

もたくさん居るとは限らんのよ。この風向きの時には、こう魚が動いたとか、こういう天候のあとは、ここに魚がいたとか、いつも考えながら漁をしているが、それでも、たくさん取れる日もあれば、そうでない日もあるのだ。」

また、山田氏は、自らの性格を「ざっくばらん」だと言う。「漁師は経費がかかる。網やカキのいかだ、えさ。魚が取れるまでにたくさん先行投資しなければいけない。だけど、長いこと漁師をしているから、機材やえさを買うところの業者とは、みんな知り合いだ。うまい魚がとれた時に少し持っていくのよ。だからみんな安くしてくれたり、時には仕入れ値で譲ってくれたりすることもある。俺はざっくばらんな性格だからな。言いたいことを言って、自然に付き合う。この前も、知り合いにただで車を譲ってもらったぞ。飼犬だってそうだ。他にもたくさんあるぞ。人との縁は大事だ。」と、山田氏は語る。「しかし、一番うまい魚は人にはやらん。絶対自分で食べる。あまり人には言えないが。なんと言っても、これが楽しみだからな。だからがんばれるというのもある。どんな高い料亭でも、こんなに新鮮でうまいものを出す店なんて、絶対に無いからな。漁師の特権よ」と、山田氏は新鮮な魚をつまみに焼酎を飲むことを、日々の楽しみとしている。

2 - 2 山田氏の一日

ここでは、10月から11月の山田氏の一日について書く。

山田さん夫妻の1日は午前3時に始まり、夕方7時に終わる。冬季のカキの収穫期には、明るくなってから収穫に出るため、起床時間は5時頃となる。起床時間は、潮の満ち干きによって2～3時間前後することもあるが、漁に出て、朝市に出荷するのにちょうど良い3時に起床することが多い。夫妻は平日も祝日も関係なく、海が荒れて漁に出られない日をのぞいて、毎日漁に出ている。

山田夫妻は、午前3時に起床すると、トラックで漁港へ行って船に乗りこみ、定置網にかかった魚を採りに行く。定置網のある場所につくと、海に捨てられる雑魚を狙って、たくさんのカモメやスナメリが船の周りに寄って来る。夫妻は網を引き上げ大量の魚を仕

分ける、という作業を繰り返し、1時間以上かけて定置網漁を終えると、カニ漁へ向かう。

暗い海の中を、カニ漁が仕掛けてある場所まで移動する。カニ漁のポイントにつくと、縄を二人でたぐりよせ、カニカゴを一つ一つ引き上げて、えさに誘われて仕掛けの中に入ったカニを、専用の箱にふり落とし、空になったカニカゴは再び海に投げる、という作業を繰り返す。漁場を2つ回る頃には、もう午前5時をまわっている。

港に帰り、漁獲物をトラックに乗せて朝市が開催される公設市場へ行って、それらを一時保管する。それから6時までの間、家へ帰り、お茶を飲んだり、軽くご飯を食べたりして一休みする。6時過ぎには再び市場へ行き、漁獲物をいくつものとり箱に分けていく。横取りしようと野良猫がたくさん集まってくるので、魚を盗まれないように夫妻は仕分けをしながら気を張り詰める。

6時半をまわったころから、朝市に参加する人々が徐々に集まってくる。7時になるまでの時間は、漁業者とお客さんの雑談の時間である。セリには定置網漁をしている4つの漁業者が出荷し、7時に始まって7時半には終わる。

朝市が終わると、奥さんはその他の漁業者と共に、セイロをホースの水で洗って片付け、市場に水を流してそうじ。山田氏は一足先に家へ戻り、焼酎を飲みながらテレビを見る。

奥さんが戻ってくると、朝食である。その日の朝に海から取ったもののほか、目玉焼きにハム、キャベツの千切りとコーヒーなどの洋風な食事風景であることが多い。その時は、飼犬も部屋へ上がって夫妻と共にご飯を食べる。一家団欒の時間である。

朝食後、山田氏はテレビを見たり、主に、刺し網漁業に使用する網を編んだりして過ごす。カニ籠に仕掛けたえさが無くなってくると、その準備をすることもある。カニ漁には鯖の稚魚を使うが、業者からそれを買った後、カニカゴにしかける作業をこの時間にすることがある。山田氏には、読書やパチンコなどの趣味があるが、このように、漁に出ていない日中も準備などで忙しく、趣味についやす時間などないように思われる。「漁師は個人事業

主だ」と語る山田氏は、年中無休なのである。

日中の作業が終了すると、夕方5時ごろ夕御飯を食べ、食後は天気予報を見るなどして、夫妻は七時に就寝する。山田夫妻の一日はこのようにして過ぎる。

2 - 3 季節の漁

山田氏は、年間を通して曾根干潟で最も多くの漁を行なっている。

以下は、山田氏に話しを聞いて、年間の漁期をまとめたものである。

桝網漁業	定置網漁	4/20～12/20頃
刺網漁業	アミ漁	8月～11月
	アナゴ漁	8月～11月
	カレイだて	10月末～2月初旬
カゴ漁業	カニ漁	3月～11月
	イカ漁	6月～7月末
雑魚漁業	ウナギ漁	5月～10月初旬
養殖	カキ養殖	11月下旬～3月

2 - 4 漁師の気象予報

その日の漁は風向きや天候によって大きく左右される。「住んでいる地方の明日の天気は予想できなければ漁師はつとまらない。漁師は皆、各々が住む地方の気象予報士だ。天気予報より当たることがあるくらいだ。」と山田氏は言う。「冬と夏で収穫に大きな差があるが、それは気温が違うから。季節に関係なく風が違えば収穫量は毎日違う。魚の道（魚がたくさんいる場所）は、風の影響を受けるからだ」と山田氏はいふ。15メートルほどの差で、大量に魚がいる場所と全くない場所に分かれることもあり、そのため山田氏は天候や風向きに敏感である。自らの経験から得たものも多いが、曾根干潟で昔から伝えられてきた様々なことわざなどがある。以下はそれらをまとめたものである。

1 風

東風

東風は、方言で「コチ」と読む。曾根新田では瀬戸内海からの風になり、東風が吹くと海がにごると言われている。海がにごって魚の視界が悪くなるため、定置網や刺し網に魚がたくさんかかる。そのため台風の前夜などの海が荒れた日も、漁をするには好ましいとされる。

南風

南風は方言で「マジカゼ」と読む。暖かい風で、魚が活発に動くので、定置網や刺し網にもかかりやすく、魚がよくとれる好ましい風といわれている。夏によく吹く風だが、冬に吹くとアミがよく取れる。

西風

西風は方言で「ニシ」と読む。曾根新田では陸側からの風になり、海がきれいになって透明度があがるとされる。魚の視界が良くなるので定置網や刺し網にかかる魚が少なく、漁にとって好ましくない風である。

北風

北風は冷たく、魚は温度変化に敏感であるため、夏でも冷たい北風が吹けば魚の動きが鈍くなってしまう。そのため定置網や刺し網、その他の漁でも魚が取れないとされており、最も好ましくない風である。

2 雲

貫山、足立山に雲がかかる

湿度が高く、翌日は雨が降る可能性が高い。また、飛行機雲が一分くらい消えない時も、同じく湿度が高いため、翌日は雨が降る。

風雲（カザクモ）

風向きを知るための行為のこと。雲がどの方角に流れていくかで、明日の風向きを知る。北極星の周りがある雲を飛雲（トビクモ）といい、山田氏は朝方、飛雲の流れる方向を確認する。その雲が流れる方向にその日の風が吹く。

「九日、十日は明け暮れたとえ」

「たとえ」とは方言で満潮のことをいう。旧暦の九日と十日は、朝と夕方の6時～8時は満潮であるという意味。

「春の夕焼け桶をすけ、秋の夕焼けカマを研げ」

春の夕焼けがキレイだと翌日は雨が降る。秋の夕焼けが美しいと、翌日は晴れるので、稲刈りのためにカマを研いだほうが良いという意味である。

第三章 山田氏の行なっている漁業について

3-1 定置網漁

曾根干潟で定置網漁が行なわれるのは、間島の後方、東側の範囲である。その中で、現在山田氏の定置網は間島から北東に行った所にあるが、沿岸の好漁場を長期間にわたって独占して操業するので、免許にあたっては地元の漁業協同組合などの団体に優先して免許する方針がとられている（金田 1995）。そのため、漁協では不公平のないように、毎年くじ引きをして場所を決める規則になっている。

山田氏が行なっているのは、小型定置網の柵網である。垣網、囲網および囲網の屈折した角に取り付けた複数個の円錐形の長袋網の3部からなる。この長袋網の中に2～3個の漏斗網を取り付け、いったん入った魚は確実に逃げられないような工夫がしてある。網具は干潮時には干潟となり、満潮時には海水が差してくるような場所に設置され、満潮時に陸岸に近寄った魚介類が、干潮時沖へ退く際に網目に刺さったり、袋に入ったりしたものを採捕するものである。漁獲にあたっては、漁師1～3人が数個の長袋網の張網を緩めて袋網を順次揚げて魚を捕獲する（金田 1995、野村 2000）。

定置網にはカレイ、ボラ、アナゴ、フグ、スズキやクロダイなど様々な季節の魚がかかる。定置網のある場所につくと、奥さんが引っ掛け棒で網の一端をとり、船のへりにひっかける。山田さんがその縄を手繰り寄せて網をつかみ、海から引き上げて、網にひっかかっているカニや魚をふるいおとしながら、尻すぼみになっている網の奥へ魚を追い込んでいく。その作業を数回繰り返し、最後に魚の詰まった尻の方を船に引き上げる。底の結びを解くと、大量の、様々な魚が船の上に出てくる。ガガ（ヒイラギ）は大量にかかるので、専用の丸いカゴへ入れる。フグやカレイやアナゴなど、1匹で高値のつくものは、船の中のいけすに入れる。カニは大きな箱へ入れる。まだ小さい魚や、死んでいる魚は海に返す。分類し始めると、雑魚を捨てることを知っているカモメがたくさん船の側までやってきて、さかんに鳴く。スナメリも寄って来るが、時々雑魚に逃げ

られたりする姿や、口元が笑っているように見える顔などが愛らしく、山田さん夫妻はスナメリが来ると必ずそこへ雑魚を投げるなどしてかわいがっている。定置網漁をしている経営者は他に4つあるが、他の漁師仲間からスナメリの話聞くことはほとんどなく、山田夫妻の定置網にしか寄ってこないのではないかと思われる。

定置網漁業は、カキの収穫期をのぞいて通年行なわれている。

3-2 カニ漁

カニ漁は、カゴ漁業に分類される。カゴ漁業とは、1本の幹縄に枝縄をつけ、その先端にカゴ等を結着させて海底に設置し、餌、またはそだ等により魚介類をかごの中に誘致して陥落させて採捕する漁業をいう（金田 1995）。

山田氏がカニ漁の魚場としているのは、定置網漁のある場所から間島を挟んで南側である。そこは少し深くなっており、「身の詰まった大きなカニが取れるから」と山田氏は語る。カニ漁では、通称ワタリガニと呼ばれるガザミを対象として行われている。

山田氏は11月から3月にかけて、定置網漁を終えた後カニ漁へ向かう。山田氏が船を運転し、奥さんは立って、船の明かりと頭につけた懐中電灯で海面を照らし、暗い海の上で、カニ漁が仕掛けてあるポイントを示すウキを探す。ウキの側まで来ると、棒でウキをたぐりよせ、船にひっかける。山田氏と奥さんの二人で縄を引き、山田氏がカニカゴのついた縄をつかむと、奥さんは縄から手を離す。山田氏はカニカゴを引き上げてフタを空け、エサに誘われて仕掛けの中に入ったカニを、専用の箱にふるい落とし、空になったカニカゴは再び海に投げる。時々、フグがかかっていることもある。箱におとされたカニは気が立っていて、とにかく触れるものを挟もうとする。脱皮から日が浅く甲羅が柔らかいカニは、他のカニに挟まれて死んでしまうこともある。

こうして、約20～30個のカゴをたぐりよせてはカニをカゴから出すという作業を繰り返し、カニカゴを仕掛けた漁場を2つ回って港へ帰る。

身の詰まり具合や大きさにもよるが、朝市での価格は、とろ箱1つ（カ

ニ5匹～10数匹)につき、2千円から5千円である。

曾根干潟の位置する豊前海は全国有数のガザミの産地で、全国屈指の生産漁を誇っており、特産品として「豊前本ガニ」という名前をつけて売り出している。

3-3 カキの養殖

曾根干潟でカキの養殖が始まったのは、1983年(昭和58年)である。

干潟では、冬季の漁獲が少ないため、それまではノリの養殖がさかんに行なわれていたが、全国的な過剰生産と低品質等の理由で収益が低下し、経営体数が減少した。昭和57年に、カキの養殖の試験養殖が行なわれ、その結果、他の主要生産地よりもむしろ成長や味の良いもののできたため、昭和58年から本格的に行なわれるようになった(参考資料1)。

カキいかだが並ぶのは、周防灘の羽島周辺から、新北九州空港が建設中である人工島の近くまでである。山田氏のカキいかだは二つあり、羽島の南側にある。

いかだの大きさは1つ約20畳ほどにもなるが、山田氏はこのいかだも自分で作っている。業者に頼むと費用が100万円近くかかり、台風などで破損があるたびに多額の出費となるからだ。

準備期間は3月から5月にかけてである。2本のロープを寄り合わせた「双子ロープ」を3～4メートルの長さに切り、1本につきホタテガイの殻を12～3個つける。それを、カキいかだに無数に吊り下げて置いておくと、カキの卵がホタテガイに付着し、11月下旬の収穫期には大粒カキが獲れる。

カキいかだは大変滑りやすく、深夜の収穫は危険であるため、朝の6時～8時頃に収穫される。カキの養殖を行なっている経営体は全部で25世帯あり、冬季の漁港には収穫に向かうトラックが多数止っている。ほとんどの経営体は、3人以上の家族で収穫に出かけるが、山田夫妻は他の漁と同じように、山田氏と奥さんの2人で収穫に向かう。

夫妻はいかだの上に敷いた板の上にはイスを並べ、吊り下げている双子ロ

ープを1日に平均20本ほど上げる。1つのホタテガイに、いくつもカキが付着しており、すでに死んでいるものや、付着物を棒で叩いて取り除き、カゴに入れていく。カキの殻を破損すると、見栄えが悪くなり、値が下がってしまうため、収穫の際には気をつけなければならない。

3～4時間かけて収穫したカキは、双子ロープ1本につき8キロ前後にもなり、1日に少なくとも200～300キロの収穫となる。

カキの収穫期になると、漁業者がカキの収穫に赴く時間と重なってしまうため、朝市は週に3回のみ行なわれるようになる。朝市が終了する12月20日以降も山田氏は定置網漁を行っており、その水揚げは、曾根新田周辺に訪問販売などを行っている。

カキの収穫期には、新田で赤や青の「カキ直売店」と書かれた旗がいたるところで見られる。収穫されたカキは朝市に出荷されることはなく、旗を見て訪ねて来る人や、通りすがりの人に直接販売されているほか、漁協にくる注文を受けて北海道から沖縄まで発送されている。これらの注文などを上回る収穫がある経営体は、遠くの市場に赴いて出荷するなど、それぞれの方法で販売している。

カキの価格は大粒のものが1キロ800円、5キロで4000円。中くらいの粒が1キロ700円、5キロで3500円である。大粒のものと中くらいのものを半分づつ混ぜたものは、1キロ750円、5キロ3750円で販売され、小粒のものが1キロ500円、5キロ2500円で販売されている。

3-4 ウナギ漁

山田氏の父親がウナギ漁をしていた約50年前には、一日平均30～40キロの収穫があり、ウナギ漁のみで生活することも可能であったが、年々ウナギが減少してきたため、現在ではかつての10分の1ほどの収穫しか望めなくなった。山田氏は収入のためではなく、自分が食べたい時や、時間の空いたときなどに趣味としてとっている。そのためウナギは朝市に出荷されることはなく、まとまった量が取れた時には、希望する地元住民の電話予約制で売買されている。相場は1キ

ロ（3～4匹）3千円である。

山田氏のウナギ漁には、昔からの方法が用いられている。ウナギには様々な習性があり、それに応じて漁の方法も工夫を凝らしたものである。

以下は、山田氏が現在利用している「シバ漬け漁」、「竹筒漁」の他、曾根干潟でかつて行なわれていた方法について山田氏に話を聞き、まとめたものである。

シバ漬け漁

シバ漬け漁とは、枯れ枝に絡みつくうなぎの習性を利用したもので、全国で見られる漁の方法である。

シバ漬け漁には、葉が落ちにくく、腐食しにくいとされるハイの木（別名「うなぎシバ」）の枝を用いる。ハイノキ（*Symplocos myrtacea*）の枝を、長さ約1メートルの長さに切り、葉をつけたまま数本束ねて直径80センチほどの太さにする。これを全長約1キロメートルの長さの浮きと浮きの間に7～8メートル間隔で20～30個ほどつけて海に沈める。数日間放置した後、ゆっくりと引き上げて、水面に近くなったら網で受け、水から離して束を振り、枝に絡み付いているウナギを捕まえる。

引き上げるシバの量は自分で決められるため、時間の調節も可能であり、手間を要しないため、山田氏は現在もこの方法を用いている。

関西ではハイの木ではなく笹が用いられているため、笹漬け漁とも呼ばれている方法である。

竹筒漁

竹筒漁は、暗くて狭い場所を住みかとするうなぎの習性を利用した方法である。

約1メートル20センチほどの長さに切った真竹を、節を取って直径約15～20センチの筒状にする。それを三本束ね、海から引き上げる時にうなぎが逃げてしまわないように、両端にヒモを取りつけて水平を保つようにする。それを30個ほど用意し、シバ漬け漁と同じ形で5日～10日間の間海底に沈めておく。

数日間定置した後、竹筒を海面まで水平を保つように引き上げて、中に入ったウナギをふるい落とし、それを網で受ける。

この方法も、シバ漬け漁と同じく、時間の調節が可能で、餌も使用しないため、山田氏は現在もこの方法を利用してウナギ漁をしている。

ヤナ漁（石倉漁）

物と物の隙間を寝床とするうなぎの習性を利用した方法である。

ヤナとは方言で石のことを指す。うなぎは泥砂の中に身を潜めることを好むので、引き潮時の干潟で、海底が泥砂に覆われていなくてウナギの潜む場所のない所を選んで、漁場とする。大小さまざまな石を積み重ねて、高さ70センチから1メートル、直径1メートル50cm～2メートルの小山を作る。数日間放置し、退き潮時に小山の周りを網で囲んで石を取り除き、隙間に入っていたうなぎを網ですくって捕まえる。

かつては相当な漁獲があったが、石を取り除いてうなぎを捕獲するまで少なくとも3時間は要し、日中の引き潮時に漁の時間が限られるため、現在では山田氏は行なわなくなった漁法である。

地獄釣り

地獄釣りは、餌を用いてうなぎを釣る方法である。満潮時、水深が約5メートルの時に行われる。長さ約30センチの糸にミミズなどの餌を無数につけて丸め、長さ約3メートルほどの竿の先端につける。山田氏いわく、「ウナギの通り道」という道があり、ウナギが同じ場所に多く潜んでいる場所があるという。その上に船を固定し、餌をつけた竿を船のへりから沈めて海底につけ、うなぎが噛み付くと引き上げて捕まえる。うなぎの通り道は日によって異なり、わずか数メートルの差で収穫に大きな差が出るためポイント選びが重要であるが、毎日ウナギ漁をしていなければ見極めることは難しい。収穫量は漁師の勘に大きく左右される。

延縄漁

餌を用いた漁の方法である。約1キロメートルの長さの浮きと浮きの間に、3～4メートル間隔で、餌を仕掛けた釣り針を沈めておく。餌にはエドジャコ、貝類、イワシや小魚などを用いる。うなぎの他にアナゴもかかる。

搔きうなぎ

日中の引き潮時に行なう。水深約30センチ～1メートルの深さを歩き、うなぎが地面にもぐった時にできた穴を探し、「うなぎ搔き」と呼ばれる約2メートルほどの大きな熊手のようなもので穴の周囲を掘り、出できたうなぎを網ですくって捕まえる。

また、夜掘り（夜漁）と呼ばれる方法で、夜間に行なわれる方法もある。主に夕方7時頃から深夜12時頃に多く行なわれ、懐中電灯で海を照らしながら、搔きウナギで使う「ウナギ搔き」で、潮が満ちてくる際に波と一緒に泳いでくるウナギを引っ掛けて捕まえる方法である。

うなぎてご

餌を用いた仕掛けを使ってうなぎを捕まえる方法である。長さ役80センチ、直径15センチ～20センチの筒状のものを用意する。プラスチックでも、木でも竹でもかまわない。中央に餌を仕掛けて、両端にもどり（または「かえし」）をつけて、一度入ったら出られないような仕組みにする。これを20個～30個ほど用意し、約1キロメートルの長さの浮きと浮きの間に7～8メートル間隔でつけて海底に沈めておく。満潮時に行なわれる。

穴釣り

穴釣り漁とは、川でうなぎを捕まえる方法として曾根新田で、かつて一般的に用いられた方法である。川の水が引く引き潮の時に行なう。釣り針や、なければ木綿針をろうそくの火であぶって釣り針のような形にしたものにミミズを通す。潮が引いた後、川岸のあらわになった石垣の隙間に餌をつけた針をもぐりこませ、鋭い嗅覚で嗅ぎ付けたうなぎが嘔みつてきたところを捕まえる。現在では川壁のほとんどはセメントでウナギの入る隙間があいておらず、数も激減してしまったため、現在この方法でウナギを捕まえることは難しい。

かしばり

穴釣りと同じく、池や川の周辺でうなぎを捕まえる方法として、昔から一般的に用いられてきた方法である。長さ1メートルほどの釣り竿を用意し、釣り糸の先端に餌をつけた釣り針を

つける。それを水中にたらし、地面に固定して一晩おいておくと、ウナギやナマズがかかる。

山田さんの少年時代には、これらの方法でウナギを捕まえてはおやつ代わりに食べていたという。

第四章 朝市

朝市は、曾根新田にある公設市場で行なわれる。ここでは、大きな市場で見られる「移動競り」ではなく、とろ箱と呼ばれる箱に魚を入れ、一つ一つ台の上に乗せて行なう昔ながらの「台競り」を見ることができ、毎朝地元住民と漁業者の交流の場として賑わいを見せている。

朝市は、毎年カキ養殖の準備が終盤に入る4月の20日頃に始まり、カキの養殖がさかんになる12月の20日頃まで開催される。

漁業者は6時半頃に市場へ行き、出荷する漁獲物を仕分けする。カニであれば、甲羅の柔らかいカニと固くて身の詰まったカニ、大きいカニと小さいカニという具合である。7時近くになると徐々に人々が集まってきて、次第に賑やかになっていく。

現在、朝市に参加する権利を持つ仲買人は全部で94人おり、そのうち60人は曾根新田の住人で、毎朝決まった顔ぶれが訪れる。

台の上に立ち、競りを仕切る「競り子」と呼ばれる人は、誰が何を競り落としたのかをメモする書記の役目も同時にこなしており、朝市が終わると、競りの様子を録音したカセットテープを聞きながら伝票を作成し、その日の9時までに漁協に持っていくことが仕事である。6年ほど前までは、書記と競り子に別れていたが、4年前から、現在競り子を勤める奥田富江さんが両方を同時にこなすようになった。

競りに参加するには、曾根漁協に口座を作り、仲買人に申し込まなければならない。口座を持ち、曾根新田の住人である場合は、競り落とした金額を3日以内に直接、漁協へ支払いに行く決まりになっている。曾根新田の住人でない場合は、口座からの引き落としになる。そのため、曾根新田の住人でない人が仲買人に申し込む際は、新規の口座に5万円と曾根新田に住む住

人の保証人が必要となっている。それらは10日間単位で漁業者の口座に振り込まれるというしくみになっている。

仲買人の資格を持たずに競りに参加することはできないが、朝市の始まる前に、漁業者と直接取引をして漁獲物を買うこともできる。また、漁獲物の主な流通は朝市であるが、山田夫妻の自宅には、「**が取れたら取っておいてくれ」「(いくら)で**を買いたい」など、予約や注文の電話がかかってくるのが度々あり、競りに出されずにやりとりされる漁獲物も少なくない。ウナギはこのような電話予約によってのみ取引されている。

仲買人は、競り落とした漁獲物を家庭で消費するほか、親戚や友人に販売したりしている。

7時前になると、次第に人が集まってくる市場は賑やかになっていく。「この前あんたのところから買ったカニ、やわ(身が詰まっていなくて、柔らかいカニ)だって言っていたけど、たくさん身が詰まっていたおいしかったよ」「この前はあんなに安くしてくださいって、ありがとうございました」と、たくさんの方が山田夫妻に話し掛けてくる。仲買人同士で世間話に花を咲かせる人もいれば、仕分けをする漁業者の後ろから漁獲物を覗き込んだり、触れたりする人もいる。この朝市が開始される前の数分間は、仲買人にとって、漁業者や周辺地域の人々とコミュニケーションをとる時間でもあり、どこの漁師の何を競り落とすかを、あらかじめ決める時間でもある。

7時になると、競り子さんが台の上に立ち、「**年**月**日、7時、朝市始めます！」の号令をかけ、セリが始まる。台を取り囲む人々は、目をつけていた魚介類の乗ったとろ箱が台の上に出されると口々に値段を叫び、最も高値をつけた人がそれを買う権利を得る。

曾根漁協では、とろ箱を引き寄せて漁獲物を間近で見ると「かぎ棒」と呼ばれる先の曲がった棒を販売しており、競りに参加する人が多い時は、かぎ棒を持っている人々が最前列に立つことがある。目をつけていたとろ箱が台の上に出ると、値段をつけるよりも早く、複数の方がかぎ棒で自分の元へ引き寄せ合う姿が見られること

があり、最も活気に満ちた時間になる。

競りは30分ほどで終わり、その後、フグやエイなどの魚をさばく人々の姿が見られるが、漁業者によるサービスではない。仲買人のほとんどは、フグをさばく免許を持っており、免許を持たない人は、競り落とした後にどこかの魚屋に持っていくという。

朝市に訪れて漁獲物を購入する仲買人は、毎朝ほとんど同じ顔ぶれであるが、小売店や業者に卸している人はいないという。仲買人の資格を持たない知人や友人に頼まれることも少なくないが、仲買人は主にセリ落とした漁獲物を家庭で消費するほか、曾根新田周辺に住む親戚や友人に販売している。山田夫妻や他の漁業者の生産した漁獲物は、仲買人を通して曾根新田の周辺地域に広がり、消費されている。

第五章 考察

都市近郊にありながら、多くの絶滅危惧種が生息し、ズグロカモメをはじめとする渡り鳥が毎年越冬に訪れる曾根干潟は、新北九州空港の建設などにより危機的状況にあるとされ、環境保護の観点から注目を集めるようになった。しかし、干潟の保護をすることの意味とは何だろうか。

現在、日本の干潟の43%が危機的状況にあるとされている。おもな干潟は全国で37ヶ所あり、このなかで、環境庁がとくに野鳥のために重要だと公表しているのが千葉県利根川河口をはじめとする曾根干潟など、13ヶ所の干潟である。その中で、将来にわたっても確実に残せる形になっているのは、ラムサール条約登録湿地の千葉県谷津干潟だけである。また、これら13ヶ所の干潟の中で、開発事業などにより危機的状況にあるとされているのが7ヶ所もある。曾根干潟は、沖合いの新北九州空港建設により、これら危険な状態にある7ヶ所の干潟に含まれている(註5)。

山田氏は、曾根干潟で専業漁師を営むベテランの漁師である。山田氏が行っている漁業の全てには干潟の地形や環境に合わせて様々な工夫があり、伝統的な方法に自らの経験をプラスして、日々思考錯誤しながら漁に出ている。季節ごとに漁法を変えながら様々な旬の魚を採捕してきた山田氏

は、干潟を知り尽くした存在であり、漁業に携わるようになって40年の経験からくるそれらの知識は干潟を保護する上でも必要なものではないだろうか。

また、曾根干潟の豊かな自然は、そこで営まれる漁業に大きな恵みをもたらす一方で、多くの魚介類を提供し、周辺地域の人々の生活を支えてきた。山田氏や他の経営体の生産する漁獲物は、地元を中心に流通し、消費され、さかんに行なわれているカキの養殖では、いくつもの河川から流れ込んだ豊富な栄養分が特産品の「一粒カ

キ」を生み、人々の生活を支えている。

環境保護にあたっては、そこで生活する人々のくらしの保護について考えなければならない。新北九州空港の建設が進む中で、ラムサール条約の登録湿地への動きが見られるが、曾根干潟を生活の場としている漁業者や、干潟の豊かな資源によって支えられてきた周辺地域の人々の生活について考え、今後の曾根干潟の保護について模索していかなければならないだろう。

謝辞

本稿を作成するにあたって、たくさんの方々のお世話になりました。自宅での宿泊、漁や朝市へ同行させていただき、山田夫妻、親族の方々に長期間にわたって多大な迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。貴重なお話を聞かせて頂いた上、参考文献もお貸ししてくださり、誠にありがとうございました。深く感謝の意を表したいと思えます。

曾根漁業協同組合の方々、朝市で競り子をなさっている奥田富江さま、仲買人の皆様には貴重なお話を聞かせていただきました。新垣さまには曾根新田の歴史や行事など、参考になるお話を聞かせていただきました。

論文の作成にあたっては、参考文献を貸してくださり、ご指導してくださった竹川大介教授に感謝致します。今田文さまには、曾根新田の地図作成にあたり、多大な援助を受けました。ゼミ生の皆様には、最後までお世話になりました。

皆様のご厚意に深く感謝致します。

参考・引用文献

福岡県水産林務部水産振興課『豊前海のさかな』（財）福岡県豊前海漁業振興基金

金田良禎之 著 1995 「日本の漁業と漁法」 成山堂

和田 吉弘 著 2000 「人と魚の知恵くらべ」 岐阜新聞社

廣瀬 慶二 著 2001 「うなぎを増やす」 成山堂書店

津谷 俊人 著・画 1995 「図説 魚の生産から消費」 成山堂書店

塩野米松 2001 「日本の漁師」 新潮社

鳥越浩之 編 1997 「試みとしての環境民俗学 琵琶湖のフィールドから」 雄山閣出版

篠原徹 編 1998 「現代民俗学の視点 第一巻 民族の技術」 朝倉書店

野村正恒 著 2000 「最新 漁業技術一般」 成山堂書店

参考資料

協賛 福岡県漁協青壮年協議会 福岡県有明海区研究連合会、福岡県漁協婦人部
連合会 福岡県水産団体指導協議会
1990 「第23回 福岡県漁村青壮年婦人研究活動発表」 福岡県
2001 「北九州市水産要覧」 北九州市経済局農林水産部水産課

参考・引用HP

註1 北九州市ズグロカモメホームページ
(http://www.city.kitakyushu.jp/~k2602010/sosiki/kanri_ka/shizen/zug/index.htm)

註2 関門見聞録 曾根干潟シリーズ2 曾根干潟の生き物
(<http://www.navitown.com/kanmon/259.html>)

註3 もったいない通信 環境ヒーロー特集 曾根東小学校
(<http://www.mottainai.gr.jp/past/sone.htm>)

註4 毎日新聞ニュース 「生きる化石」カプトガニ謎のベビーブーム
(<http://www.mainichi.co.jp/eye/feature/details/nature/topic/news/200109/06-01.html>)

註5 各地の干潟
(<http://www.nacsj.or.jp/database/higata/higata-index.html>)



图 1